



# 自宅のような安心感と 自分らしくいられる環境を

平成12年の介護保険制度のスタートは、訪問看護の位置づけを明確にしました。私は、その頃テレビで観た、肝臓がん末期の40代の夫を、妻が自宅で看取るまでを追ったドキュメンタリーが忘れられません。歩けなくなり、食べられなくなり、痛みで苦しいはずなのに、家族に囲まれた本人の穏やかな表情が印象的でした。その方を亡くした家族が、悲しみの次のステップに進んでいくまでを目にして、「自宅の安心感に包まれた最期」が私のテーマとなりました。

株式会社アースは平成21年9月に訪問看護事業からスタートしましたが、在宅でありながら医療処置を必要とする利用者がいかに多いかをすぐに痛感しました。しかも、病気に境界線はないはずにもかかわらず、医療処置の度合いが高いほどレスパイト入院やショートステイの受け入れは断られることも多く、介護者である家族の疲労がピークに達しているケースが多くありました。訪問看護は利用者への医療サービスですが、在宅医療はチームワーク。私たちは利用者のためにも、家族の精神的・肉体的な疲労を見逃さずわけにはいきません。訪問看護師としては施設入居を勧めることに葛藤を覚えました。どうしても在宅生活が厳しい人たちはいるのです。

私はその思いを強くし、療養デイサービスの事業と、やむを得ず自宅を離れなければならなくなった方が「自宅の安心感に包まれた最期」を迎えられる高齢者住宅の事業を始めました。それが、高齢者住宅経営者連絡協議会のリビング・オブ・ザ・イヤー2014で優秀賞をいただいた、サービス付き高齢者向け住宅「サボテン六高台」です。かつての長屋のようなあたたかい交流を実現した住宅で、がんの末期、難病、医療処置の必要な方でも入居できます。

当社の経営陣には、利用者でもあるALS患者の船後靖彦がいます。船後の存在は、職員が利用者(入居者)と同じ目線になることを教えてくれます。管理者は船後と同じ目線で仕事をするので、お互い足りない部分を補い合うことが当たり前になりました。それが自分のためになる行動だとみんなが気づいたのです。

現在3年目の「サボテン六高台」では、入居者へのかかわり方を見直す時期に入ってきました。「サボテン六高台」での重度の方の介護と、厚生労働省が打ち出してきた介護のあり方が正反対だからです。私たちは呼吸器を装着している方への関わり方を、入居者全員に適応させてしまいがちでした。入居者や家族からの毎月のアンケート結果は、ほとんどの方が職員の対応に「不満がない」です。それは裏を返せば、「なんでも叶えてもらえる」「何もしなくてもやってもらえる」ことを表しています。本来はできることは自分でいい、私たちは必要ときに手を貸すべきなのです。

たとえば、お菓子の包み紙をなかなか開けられないとき。自宅なら一人でやらなくてははいけないことです。これを見守れずに奪ってしまったら、指先すら使わない人間らしさのない日常になってしまいます。極論を言えば、在宅のひとり暮らしなら、歩けなくても、喉が乾けば水は自分で取りに行かなくてはならないのです。施設に入居してもできることは自分でいい、私たち介護者は、決して気がつかないわけでも無視しているわけでもなく、見守りながら寄り添うこと。高度な介護技術ですが、これからはすべての職員がこれをマスターし、入居者が自分らしくいられる環境づくりに努めていきたいと思います。

在宅医療の時代、利用者と家族のあらゆる面に関わり、長期にわたって支えていける私たちのような施設の運営は、もっともやりがいのある分野の一つです。看護や介護に関わる人たちは、利用者の命を輝かせる仕事として誇りに思っており感じています。

## 佐塚 みさ子

さづか・みさこ

### ● PROFILE

株式会社アース代表取締役。看護師。東京都内の病院勤務、千葉県内の有料老人ホーム看護師長を経て、平成21年、千葉県松戸市に株式会社アースを設立。訪問看護・訪問介護など8つの事業を展開。

